

帚木蓬生

Hahakigi Hosei

ひみこ

下

日御子



講談





講談社文庫

日御子(下)

帚木蓬生

講談社

著者| 帚木蓬生 1947年、福岡県生まれ。東京大学文学部仏文科卒業後、TBSに勤務。2年後に退職し、九州大学医学部を経て精神科医に。現在も開業医として活動しながら、旺盛な執筆活動が続けている。'93年『三たびの海峡』で吉川英治文学新人賞、'95年『閉鎖病棟』で山本周五郎賞、'97年『逃亡』で柴田錬三郎賞、2010年『水神』で新田次郎文学賞、'11年『ソルハ』で小学館児童出版文化賞、'12年『蠅の帝国』『蛍の航跡』で日本医療小説大賞、'13年『日御子』（本書）で歴史時代作家クラブ賞作品賞を受賞。

ひ み こ
日御子(下)

ははき ぎ ほうせい
帚木蓬生

© Hosei Hahakigi 2014

2014年11月14日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——大日本印刷株式会社

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277972-2

ひみこ
日御子(下) 目次

第二部 日の御子

5

第三部 魏使

171

解説 末國善己

364



講談社文庫

日御子(下)

帚木蓬生

講談社

ひみこ
日御子(下) 目次

第二部 日の御子

5

第三部 魏使

171

解説 末國善己

364

2~3世紀頃 倭国想像図



第二部 日の御子



1 日食

炎女^{えんめ}や、きのうの日食は見たかい。光り輝いている日が、少しずつ欠けて、最後には真黒になって見えなくなる。みんな外に出て大騒ぎになったろう。あたりは薄暗く
なつて、森の中にいる鳥たちも騒ぎ出した。このまま暗い昼が続けば、世も終わりだ
と、王城の住人たちも蒼い顔^{あお}で囁きあっていた。

そのうち日が少しずつ見え始めて、三日月のようになり、しばらくすると元の日
に戻った。鳥たちの鳴き声もおさまり、住民たちはお互い夢を見たともいうように顔
を見合わせ、仕事に戻っていった。

満月がたちまち欠けて橙色になる月食は、わたしも一度ならず見た。

しかし日が欠ける日食はそう眼にはできない。わたしは小さいころ、父の針^{しん}から聞
いて知っていた。父は祖父の灰^{かひ}から、聞いたそうだよ。その祖父も、自分で見たので
はなく、誰からか聞いていたのだろう。わたしも、まさかこの齡になつて目撃すると

は考えもしなかった。

しかし炎女や、こういう日食が稀に起こる事實は、お前の子供、そして孫にも伝えておくといい。

わたしは、天が見せしめのために、日を隠したのだと思っている。十年ほど前に倭国に起きた戦乱は、今になってもおさまるところか、いよいよ激しさを増している。どの国でも男たちは戦いに駆り出されて、弓や刀を手にして、東や西、北や南に移動していく。その間、田畑の世話をするのは、もっぱら女だ。

戦いに駆り出されて行った男たちは、全部は帰って来ない。半分が他国で命を落とし、三分の一が傷つく。わたしの三人の息子のうち、ひとりはおおかわ大河の向こうにある吉野^{よしの}国で命を落とした。もうひとりは南の国境での求^く奈^な国との戦いで傷つき、王城に戻って来たものの二十日後に死んだ。残った息子は、お前の父の朱^{しゆ}だけになってしまった。

炎女、お前も二人の叔父は覚えているだろう。二人ともいい息子だった。お前の父に劣らず体も頑丈で、頭も良かった。使^し譯^{えき}としての素養は充分にあり、どこかの国に婿として貰われて行っても、充分な働きをしたに違いない。にもかかわらず、使譯の器量を發揮しないままに命を落としてしまった。どれほど口惜しかったか、わたしは

傷ついた次男をそばで看病したからよく分かる。息子は息を引き取る際、閉じた目から、すっと涙をひと筋流した。もつともつと生きたかったのに違いない。

戦乱さえなければ、死んだ息子も、わたしの父である針や曾祖父である灰のように、漢の国まで使譯として行けたかもしれない。

男どもが起こす戦乱ほど、無意味な行いはない。欲が欲を呼び、恨みが恨みを呼び、そこに裏切りが加わって、どちらかがくたびれ果てるまで戦いは続けられる。国の領土を多少広げたところで、国の富が増え、暮らしぶりがよくなるわけではない。少しばかり国が大きくなっても、男たちの命が多数落とされれば、何にもならない。誰にでも分かりそうなこの理屈が、戦乱になると、どこかに消えてしまう。

父はよく、人を恨み、戦いを挑めば天の眼から人が見えなくなる、と言っていた。そのとおりだと思う。きのうの日食は、天が身をもつて、人の愚かさを知らせてくれたのだよ。

炎女や、わたしは、父に連れられてこの弥摩大国に来た目を、きのうのようににはつきり覚えている。穏やかな日で、田畑も荒れている今とは全く違っていた。お前は六歳になったばかりで、生まれたときから戦乱の世に育ったから、想像もつかないだろうね。

思い返すと、舟で伊都国を出て、十日ほどあとに大河の河口に辿り着くまで、兵士の姿は、ひとりとして見なかった。大河を行き交う舟も、弓矢や太刀を持った兵士の代わりに、米や野菜を積んでいた。

大河の大きさにわたしはびっくりした。こんな大河が国の真中を流れている弥摩大國とは一体どんな国なのか、右左と首を巡らせた。

大河をさかのぼり、右側に弥摩大國の王城と、木々の間に見え隠れする宮郭を眺めたときは、胸がいっぱいになった。わたしは北にある伊都国で育った。王城も低い所があり、近くに流れている雷山川らいざんも大河と比べると細かった。それでも、こんな大きな川や広い平野はないと思っていたのだよ。

棧橋に着いて陸に上がり、四方を見渡した。大河を挟んで、王城の反対側にも平野が広がり、ずっと奥に脊振せぶりの山があった。ほらここから見えるだろう。長々と横たわっているあの連山の北側に、わたしが育った伊都いと国がある。

大河のこちら側にも田畑が広がり、ところどころに村が散らばっていた。どの田も水を豊かにたたえ、舟着場からの道は田の間に三本、三方向に延びていたよ。真中の道から駆け寄って来たのが、お前の祖父と曾祖父だった。二人とも背が高くてね。わたしの婿である永えいのそばに寄ると、わたしの頭は肩の高さまでしかなかった。

その夜は、永の父の家にみんなが集まって祝ってくれた。最後には、わたしもみんなに混じって踊るはめになった。良い国に嫁に来たと、わたしは心の中で喜んで泣いていたよ。

今では、その中の何人かは戦いで亡くなったし、わたしに絹をくださった国王も、国の行く末を案じながら亡くなられた。絹で作った衣は、わたしも何回か袖を通した。しかし戦いが始まってからというものの、着る機会がない。炎女や、絹の衣は、お前にわたしの形見として与える。戦争が終わって世の中に平和が戻ったら、どうかその衣を着ておくれ。

亡くなった先代の国王は、漢かんの国に使いをやるのが望みだったようだ。漢の国に赴いたわたしの父、針から、いろいろ漢の事情を聞いたそうだ。世が平穏なままであったなら、遣使のための準備を着々と進めていたはずだよ。大きな船を造り、贈り物を用意する。使譯にも上表文を練らせ、漢の国の言葉を習熟させる。

わたしの夫であり、お前の祖父でもある永は、そのために必死に漢の国の言葉を学んでいた。韓からの国の言葉は父の釜かまから習って、かなりできていた。しかし自分では、漢の国の言葉はまだまだと、分かっていたようだ。この文字は何と読むのか、どういう意味なのか、わたしによく尋ねたよ。わたしは女でありながらも、父から漢の文

字を教えられていたので、多少の知識はあった。弟たち二人が厳しく教えられているのを脇で眺めているうちに、わたしも自然に覚えたのさ。父は、わたしが男なら立派な跡継ぎができたのにと、いつも言っていた。

上の弟の沢はまだ伊都国で元気にしている。那国に婿として渡った下の弟の決は、一昨年の戦いで命を落とした。使譯が戦いに駆り出されるようでは、正しい世の中とは言えない。

夫の永も、舅の釜も、使譯としてではなく、兵士として駆り出されて、命を落とした。お前の父である朱も、今は戦場にある。わたしは三人の男の子を産んだ。二人は戦^{いくさ}で命を落とし、残ったのは朱だけだから、朱が死ねば、この弥摩大国の使譯の家、〈あずみ〉の一族の血をひくのは、お前と四歳年下の弟、灯^{とう}しかないなくなる。

そうなれば、炎女や、お前がこの弥摩大国の使譯の教えを継がなければならない。まだ六歳なので、韓の国や漢の国の言葉はよく分からないだろう。とはいえ、わたしはお前が三歳のころから、父親に文字を習っているのを知っている。お前が聡明なのも判っている。どうやらお前は、曾祖父の針の才能を引き継いでいるようだ。

わたしに、命があと何年許されているか、それは分からない。命のある限り、お前にわたしの知識のすべてを教えようと思っている。全部覚えなくてもいい。忘れても

いい。頭の隅に、切れ切れにうろ覚えの思い出が残っているだけでも、お前が大きくなつたとき、必ず役立つ。

炎女や、お前はまだ〈あずみ〉のいわれを父の朱からは聞いていないだろう。

〈あずみ〉の一族は、遠い昔、西の方から倭国に渡ってきた人々の子孫だよ。西の方から舟で東をめざして来たので、自分たちを〈あずま〉の一族と名づけた。倭の言葉で、東は〈あずま〉だからだ。その〈あずま〉が、年を経て、〈あずみ〉になつた。

倭国のあちこちの土地に住みついた〈あずみ〉の一族は、それぞれの国で、自分たちになじみしい漢の文字を当てた。那国ではそれが〈安住〉になり、伊都国に移されて〈安澄〉になつた。この弥摩大国では〈安潜〉だ。

弥摩大国の南にあつて、いつもいがみ合っている求奈国にも、やはり昔から使譯の家があり、〈阿住〉を名乗っていると聞いている。いずれも元をたどれば、〈あずみ〉の血が混じっていると考えていい。

この〈あずみ〉の一族には、大昔から掟がある。まだお前は、父親から教えられていないだろう。女だから、あるいは教えられないまままで終わるかもしれない。

でもこれは、女であつても頭の中にしまつておいていい掟だよ。お前が大きくなるにつれて、必ず役立つ。

ほう、聞きたいかい。嬉しいよ。わたし自身、この掟をずっと守ってきたからね。ひとつは、人を裏切らない、だ。人との約束、あるいは人から受けた温かい気持、思いやりに反した行いをすれば、裏切りになる。約束は守り、恩や親切を受けたならば、返さなければならぬ。裏切るなど、けものや虫でもしない。

ふたつめは、乱れた世の中では特に大切な教えだ。人を恨まず、戦いを挑まない。なぜだか分かるかい。人を恨み、人に戦いをしかけたとたん、天の眼にその姿が見えなくなる。炎女が誰かを恨んだり、争いを挑んだりすると、炎女の姿は、天の眼から消えてしまう。お前は、この世にいないのと同じだ。山にいる猪や鹿、狸、川にいる鯉や鮒、野の虫も、天の眼には見えない。お前は、けものや魚、虫と同じになってしまうのだ。

天の眼がお前を見ている限り、いくらこの世が広いといっても、お前は天によって守られている。少しぐらい辛い日があっても、悲しい日があっても、必ずその向こうには良い日が待っている。辛いまま、悲しいままであるはずはない。

最後の三つめは、少しむづかしいかもしれない。良い習慣は、才能を超える、だよ。お前が毎日繰り返すのが、習慣だ。例えば、日の出とともに起きて、顔を洗い、口をすすいで、お母さんの仕事を手伝う。それから木簡や竹簡を削ったり、紐でくく